参考文献 1

通史

- 田中陽児・倉持俊一・和田春樹編『世界歴史大系　ロシア史』全 3 巻（山川出版社　1995～97）
  第 1 巻が 9～17 世紀、第 2 巻が 18～19 世紀、第 3 巻が 20 世紀と分かれた大部なもので、各章ごとに各分野の第一線の専門家が執筆している。当時の日本のロシア史学の最高の成果が反映されている。
- 藤本和貴夫・松原広志編『ロシア近現代史：ピョートル大帝から現代まで』（ミネルヴァ書房　1999）
  1 巻ものの標準的な通史。帝政期の歴史にかなりのページを割いている。
- 横手慎二・他『CIS［旧ソ連地域］』（自由国民社　1995 年）
  帝政期からエリツィン期までの政治・経済・外交・民族問題分野の通史。ブレジネフ期までが前半、ペレストロイカ期以降が後半を占めており、ソ連崩壊後の記述に多くの頁が割かれている。
- 和田春樹『ヒストリカルガイド　ロシア』（山川出版社　2001）
  新書判より一回り大きいだけのコンパクトなロシア通史入門書。ただし、20 世紀の歴史、とくに第二次世界大戦後から現代にかけての記述は少ない。
- 和田春樹編『世界各国史 22　ロシア』（山川出版社　2002）
  1 巻ものの教科書的な通史。比較的、帝政期とソ連期の記述のバランスが取れている。

帝政ロシア史（20 世紀）

- 加納格『ロシア帝国の民主化と国家統合：二十世紀初頭の改革と革命』（御茶の水書房　2001）
  20 世紀初頭のロシアの立憲体制の成立過程を明らかにする。
- H. カレール=ダンコース　谷口侑訳『甦るニコライ二世：中断されたロシア近代化への道』（藤原書店 2001）
  ニコライ 2 世の伝記。

ロシア革命史

- E. H. カー　原田三郎・田中菊次・服部文男・宇高基輔訳『ボリシェヴィキ革命　1917～1923 全 3 巻』・南塚信吾訳『一国社会主義：政治　1924～1926』・南塚信吾訳『一国社会主義：経済　1924～1926』（みすず書房　1967～1977）
  20 世紀最大の歴史家 E. H. カーの金字塔『ロシア革命史』の最初の部分を翻訳したもの。いまなお、ロシア革命史研究の出発点と言える。
- 梶川伸一『幻想の革命：十月革命からネップへ』（京都大学学術出版会　2004）
  共産主義の理想へ向かって着実に前進しているというボリシェヴィキ指導部の「幻想」が生んだ悲劇を、ロシア公文書館資料に基づき克明に描く。ネップが、戦時共産主義の延長上に構想されて市場経済が政策的に導入されたのではなく、飢餓民の自然発生的動向がそれを生み出したことを明らかにする。
- R. サーヴィス　中嶋毅訳『ロシア革命 1900-1927』（岩波書店　2005）
  ソ連崩壊の 20 世紀末以降、ロシア革命は再び熱い論争の的となった。帝政末期からスターリンに及ぶ文脈の内に、都市と農村、上部と下部、後発国ロシア全土のあらゆる層に起こった「さまざまな革命」の起源と交錯をとらえ直す。政治史・社会史双方をふまえた統合的視点から革命の混沌と多面性を新たに描く、ロシア革命史の入門書。
- R・パイプス　西山克典訳『ロシア革命史』（成文社　2000）
  同じ筆者の『ロシア革命』と『ボルシェヴィキ治下のロシア』をもとに、著者自身が一般読者のために縮小編集したもの。